
学内活動報告

順天堂大学医療看護学部 医療看護研究22
P.31-39(2018)

平成29年度 現行カリキュラム評価と課題

Assessment and Initiatives of the 2017 Fiscal Year Curriculum

村岡 宏子 ^{1) 2)} MURAOKA Koko	西田 みゆき ^{1) 2)} NISHIDA Miyuki	高谷 真由美 ^{1) 2)} TAKAYA Mayumi
青柳 優子 ^{1) 2)} AOYAGI Yuko	杉山 智子 ^{1) 2)} SUGIYAMA Tomoko	岡本 美代子 ^{1) 2)} OKAMOTO Miyoko
立石 彩美 ^{1) 2)} TATEISHI Ayami	谷川 泰司 ³⁾ TANIGAWA Taishi	工藤 綾子 ^{1) 2)} KUDO Ayako

I. はじめに

「3つのポリシー（ディプロマ・カリキュラム・アドミッション）」に基づく大学教育改革の実現に向けて、学校教育法施行の改正が行われ、「3つのポリシー」の策定¹⁾と公表の義務化が平成29年4月1日に施行された。看護系大学の教育においては、そうした動向を踏まえ、チーム医療を展開していく一員として、変化を予測して対応できる人材の育成、ヘルスプロモーションと疾病予防を促進できるように、対象者の身体状況を観察し判断できる能力の育成、さらに国際化や情報社会が進展するなかで自己研鑽する姿勢を育むことが求められている。各大学は、そのような時代の変化、社会や地域ニーズを反映して、柔軟にカリキュラムを変更することが喫緊の課題である。

看護学教育におけるカリキュラム構築とその運用過程には、理念に基づいた方向づけ、カリキュラムのデザイン、それを実践し、評価するという4つの段階がある。この4つの段階がより力動的に進められるように、3つのポリシーを意識したカリキュラム評価を実施し内部質保障システム（PDCA：plan do check act サイクル）を循環することが望ましい。そこで、教育

の改善を目指すべく、医療看護学部（以下、本学部）では、平成29年4月からカリキュラム評価委員会が設置された。本稿では、当該委員会の1年間の活動と学生および教員へのアンケート調査結果について述べることとする。

II. 1年間のカリキュラム評価委員会における活動

本委員会の設置にあたり、平成28年度（平成29年1月12日）に委員会立ち上げの会議を開催した。平成29年度4月よりカリキュラム評価委員会が開設され、以下のような活動を実施した。

- 5月：カリキュラム評価委員会の目的について確認
- 6月：カリキュラム評価骨子作成、情報交換（他大学とこれまでの学内における評価活動の比較検討）
- 7月：カリキュラム評価骨子決定、現行カリキュラム評価方法の確認、“申し合わせ”の検討
- 9月：カリキュラム評価システムと構図の検討、測定尺度の作成（その1）
“申し合わせ”の決定
- 10月：カリキュラム評価システムと構図の検討、測定尺度の作成（その2）
- 11月：1～4年生と新年度1年生のカリキュラム評価アンケート調査方法の決定
質問紙の妥当性の検討（教授会において質問紙に対して意見を募る。その後教員2名に対

1) 順天堂大学医療看護学部

Faculty of Health Care and Nursing, Juntendo University

2) 順天堂大学大学院医療看護学研究科

Graduate School of Health Care and Nursing, Juntendo University

3) 順天堂大学医療看護学部浦安キャンパス事務室

School Office, Faculty of Health Care and Nursing, Juntendo University

してプレテストを行い、表現や項目について回答を得た)

- 12月：4年生と教員へ調査実施
- 2月：1～3年生へ調査の実施、カリキュラム評価アンケート集計結果の確認
- 3月：2017年度カリキュラム評価アンケート実施報告書の作成、教育改善サイクルの構図（案）の承認

Ⅲ. 医療看護学部3ポリシーに基づく教育改善の構図（案）

既存の3ポリシーと、これまで行われていた学内教育を整理し、教育改善の構図（案）を作成した。学士課程教育を通じた学習成果は、卒業までに習得する単位数とともにディプロマポリシー（学位授与の方針）として提示されている。また、入学者受け入れの方針であるアドミッションポリシー、教育課程編成と実施の方針であるカリキュラムポリシーを定めている。本学部の学生が、どのような知識や技術を身につければよいのかは、コンピテンスとコンピテンシーとに定めている。本学部の3つのポリシーに基づいて、カリキュラムを実践し評価していることが可視化できるよ

う、ポリシーごとに整理した。また、入学時から卒業時までの時間軸のなかで、教育改善をめざしてPDCAサイクルが循環しているイメージを図のなかに組み入れた（図1）。

Ⅳ. カリキュラム評価アンケートの実施と内容

1. カリキュラム評価内容と構成

本学部では、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーの内容として、48のコンピテンシーを定めている。そのコンピテンシーの達成状況を測定することでカリキュラムの評価の一助になると考えた。よって、学生のカリキュラム評価アンケートは、コンピテンシー48項目から作成し、「非常にそう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の4件法リッカートスケールによって点数化した。

また、カリキュラムをどのように捉えているのかについては、山田（2014）の論稿『カリキュラム評価を教育改善サイクルに組み込み、実質化するための視点』を参考に5つの枠組み、すなわち①「カリキュラム編成（13項目）」、②「カリキュラム運営（学生：6項目、教員：7項目）」、③「カリキュラム運用（教員：5項目）」、④「カリキュラム改革の成果（教員：5項目）」、

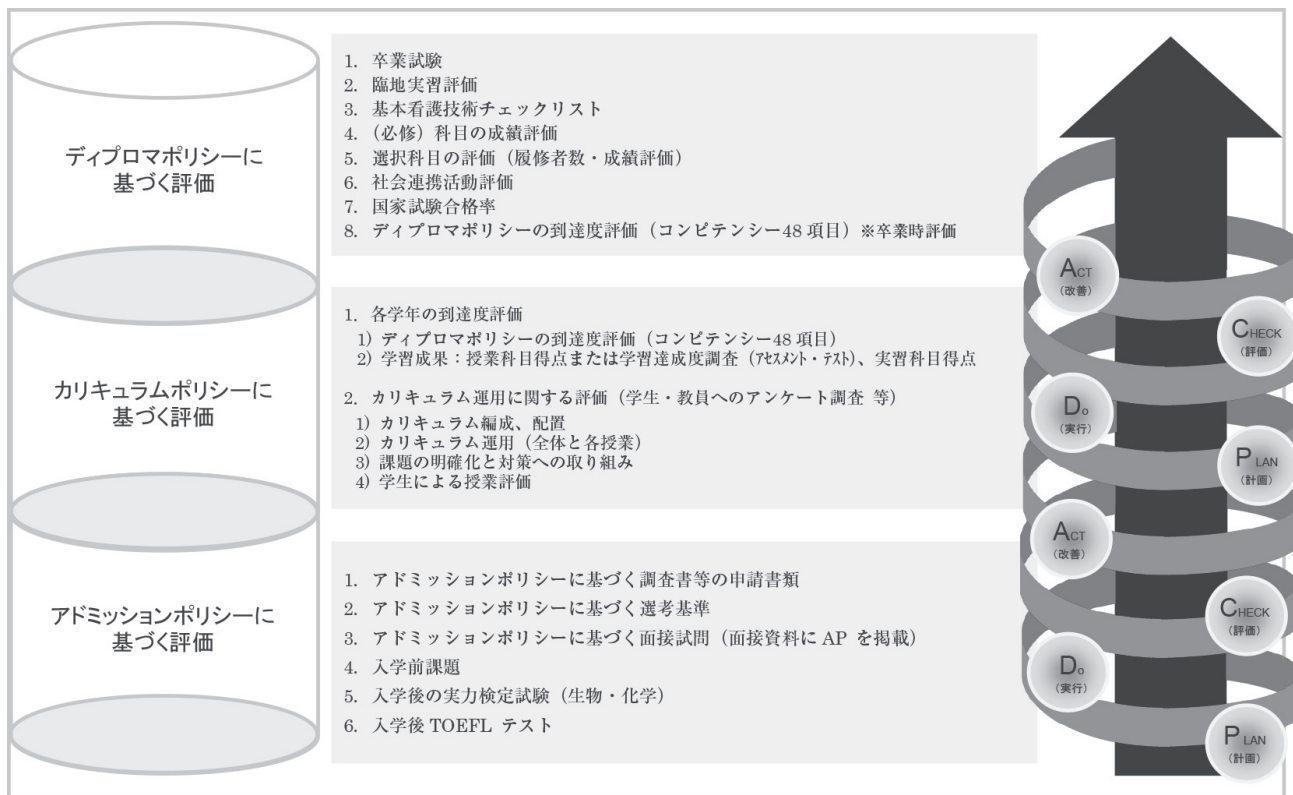


図1 順天堂大学医療看護学部における3ポリシーに基づく教育改善の構図（案）

⑤「カリキュラム分析・評価とカリキュラム改革（教員：4項目）」を作成し、各項目を「非常にそう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4件法リッカートスケールで点数化した。

全学年の学生を対象に68項目、教員を対象に33項目について調査を行った。その結果から、現行カリキュラムにおける課題を明確化し、カリキュラムの改善点や学習支援のあり方を検討することとした。

2. カリキュラム評価の対象と実施期間

平成29年度のカリキュラム評価アンケートの実施は、全学年の学生を対象とし、12月に4年生、2月には1年生、2年生、3年生へ無記名自記式質問紙を配布し、それぞれ集合調査を行った。合計802名の学生に配布し、回収率は99.3%であった。

教員へのアンケートは、12月にWebサイトから、教員66名に実施し、回収率は75.8%であった。

V. 調査の結果

1年生から4年生までの合計について、評価が低いと思われるものを中心に分析した。

以下では「非常にそう思う」「ややそう思う」を合計して述べる際に、「そう思う」と表現する。コンピ

テンシー全体で、「そう思う」は、学年の上がるごとに順次回答数は伸びていた。

1. 全学年の「ディプロマポリシー達成度自己評価」

ディプロマポリシー（以下、DP）は、5つの項目で構成されており、それぞれDP1～5で示した。また、コンピテンシーはアルファベットで示している。

1) DP1 【豊かな感性、教養及び高い倫理観を備え、他を思いやり、慈しむことのできる能力】（図2）

(1) DP1の4つのコンピテンシ『他者を思いやり慈しむことのできる能力』『教養を身につけた市民として行動できる能力』『倫理的課題に対応できる基礎的能力』『人間関係を構築できるコミュニケーション能力』のうち、「そう思う」が90%だったものは『他者を思いやり慈しむことのできる能力』であった。

(2) DP1の20項目中、「まったくそう思わない」の回答数が多い項目は、「特定の外国語を用いて、読み、書き、話すことができる」19.3%だった。この項目においては、学年が上がるほど「まったくそう思わない」が増えている。

(3) コンピテンシー20項目のうち4年生では「他者の経験を共感的に聴く力を身につけている」「看護

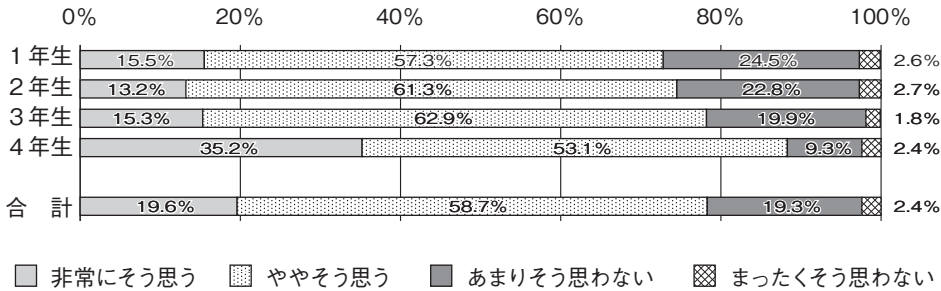


図2 DP1 豊かな感性、教養及び高い倫理観を備え、他を思いやり、慈しむことのできる能力

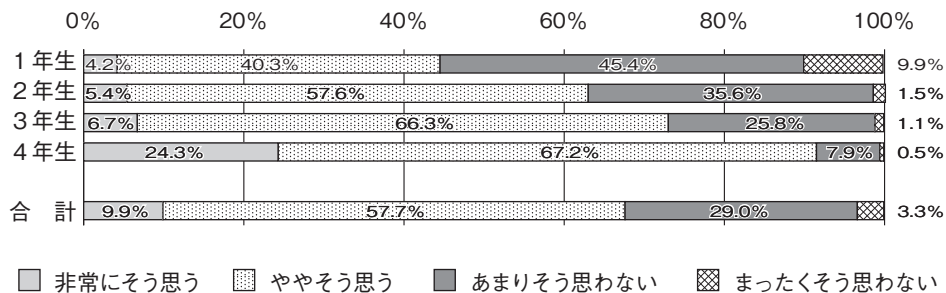


図3 DP2 個人、家族及び地域社会の人々それぞれの健康レベルに応じて知識・技術を駆使し、エビデンスに基づいた看護を実践できる能力

の対象となる人々の尊厳と権利を擁護することができる」「看護の対象となる人々と援助的なコミュニケーションを展開できる」の3項目が「非常にそう思う」が50%を超え、他の学年と大きな相違があった。

2) DP2【個人、家族および地域社会の人々それぞれの健康レベルに応じて知識・技術を駆使し、エビデンスに基づいた看護を実践できる能力】(図3)

- (1) DP2の3つのコンピテンス『医学および関連領域の知識を看護に応用できる能力』『エビデンスに基づいた看護を適切に実践する能力』『健康レベルに応じた看護を展開する能力』のうち、全ての項目において「非常にそう思う」は20%を満たしていない。「そう思う」が60%を満たしていないのは『健康レベルに応じた看護を展開する能力』であった。このコンピテンスにおいて、1年生では「そう思う」が30%を満たしていないが、4年生になると90%に達しており、学年差が大きい。
- (2) DP2-A『医学および関連領域の知識を看護に応用できる能力』の中で、「そう思う」が最も少ないのは「人体の構造と機能を説明できる」であった。しかし、1年から3年までは、50%前後であるが、

4年生になると80%近くとなる。

- (3) DP2-B『エビデンスに基づいた看護を適切に実践する能力』の中で、「まったくそう思わない」が多かったのは「地域の特性と健康課題をアセスメントできる」であった。しかし、このコンピテンスは4年生では「そう思う」が90%に達していた。
- 3) DP3【関連分野の人々と協働して、看護職者の役割を果たしていくために必要な人間関係を構築できる能力】(図4)

- (1) DP3のコンピテンス『保健医療福祉における他職種と協働・連携する能力』では、「非常にそう思う」は20%を満たしていないが、「そう思う」では60%を超えていた。
- (2) DP3-A『保健医療福祉における他職種と協働・連携する能力』の4項目全て「非常にそう思う」が20%に満たされていなかった。「そう思う」が60%に満たないのは、「保健医療福祉サービスの継続性を説明できる」「疾病構造の変遷、疾病対策の動向と看護の役割について説明できる」であった。
- 4) DP4【グローバル化が進む現代社会に柔軟に対応でき、多様な価値観を理解し、適切な判断と問題解決ができる能力】(図5)

- (1) DP4-Aのコンピテンス『国際的視野をもって活動

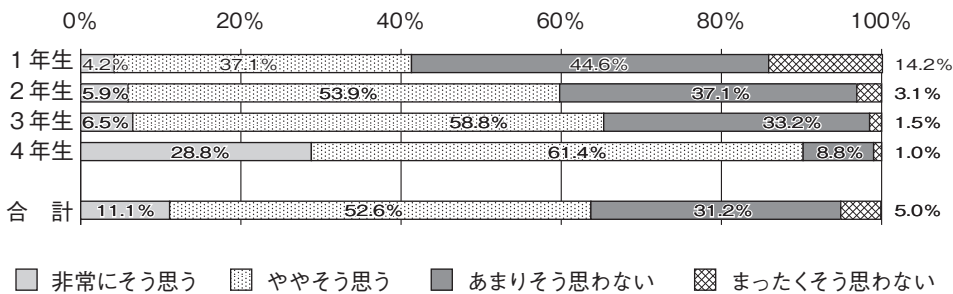


図4 DP3 関連分野の人々と協働して、看護職者の役割を果たしていくために必要な人間関係を構築できる能力

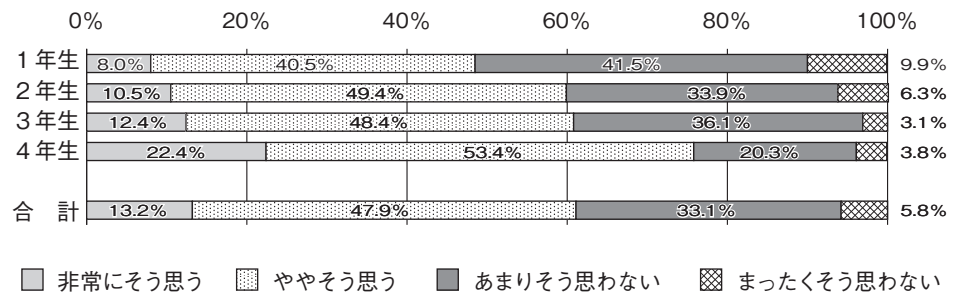


図5 DP4 グローバリゼーションが進む現代社会に柔軟に対応でき、多様な価値観を理解し、適切な判断と問題解決ができる能力

できる基礎的能力』では、「非常にそう思う」が20%に届いていないが「そう思う」では60%を超えていた。

(2) DP4-Aの4項目で「非常にそう思う」が20%を満たしていなかったのは、「世界の動静や社会の変化に関心を持ち、時代の変化に対応した判断ができる」「国内外の看護の動向に関心を向け、看護の役割や課題を説明できる」「国際的視野に基づく思考ができ、さまざまな国籍や文化を持つ人とコミュニケーションができる」の3項目であった。特に「国際的視野に基づく思考ができ、さまざまな国籍や文化をもつ人とコミュニケーションができる」については「そう思う」が50%を切っている。

5) DP5【自己の知識、技術、態度を自ら評価し、他者からの評価も謙虚に受けとめ、探求心を持って自己研鑽できる能力】(図6)

(1) DP5のコンピテンス『生涯にわたり専門職者として研鑽し続ける能力』において「非常にそう思う」が20%に届いていないが「そう思う」では70%を超えていた。

(2) DP5-A『生涯にわたり専門職者として研鑽し続ける能力』の4つの項目で「非常にそう思う」が

20%を満たしていなかったのは、「自己の日々の学習を振り返り、課題に取り組むことができる」「専門職としてのキャリア発達の過程や、生涯学習の意義について説明できる」「人々の健康上の問題・課題に対する、看護における最新の実践や研究の動向に関心を示し、看護学の発展を探求していく姿勢を持っている」の3項目であった。

2. 学生・教員による「カリキュラム（編成、運営、運用、改革の成果、カリキュラム分析・評価とカリキュラム改革）」に関する評価結果

1) カリキュラム編成

(1) 「基礎的な知識と技術が育成されるカリキュラムである」(図7)「様々な能力の向上、最先端の専門知識が身に付くようなカリキュラムである」(図8)は、学生も教員も約80~90%が「そう思う」と回答した。

(2) 「グローバル化を意識したカリキュラムである」は、「そう思う」が学生45%、教員約70%であり、相違があった(図9)。

(3) 「人間と教養」「人間の健康」「看護の理論と方法」「医療看護の統合と発展」の枠組みは適切である」

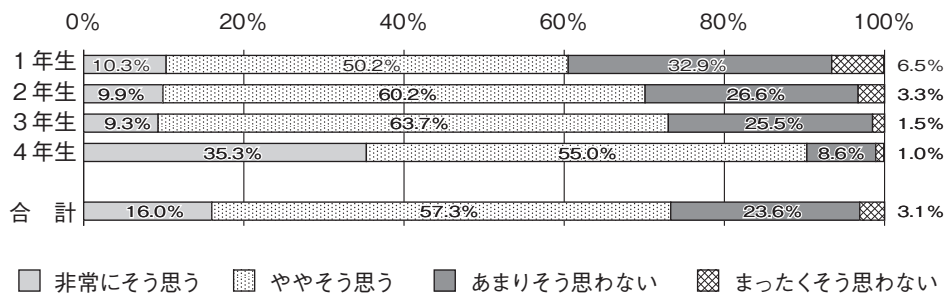


図6 DP5 自己の知識、技術、態度を自ら評価し、他者からの評価も謙虚に受けとめ、探求心を持って自己研鑽できる能力

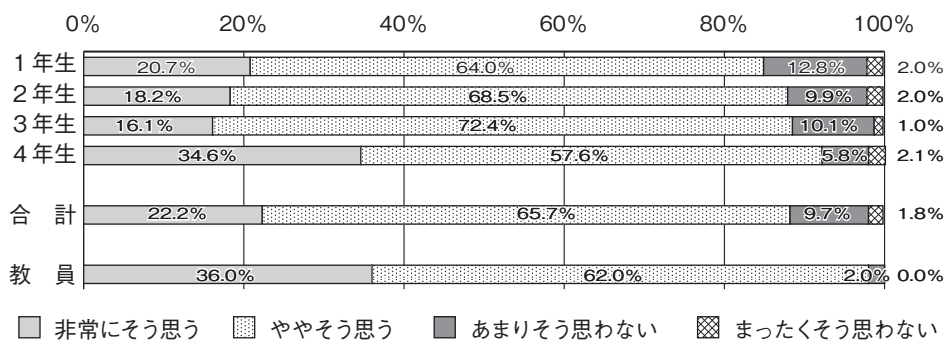


図7 基礎的な知識と技術が育成されるカリキュラムである

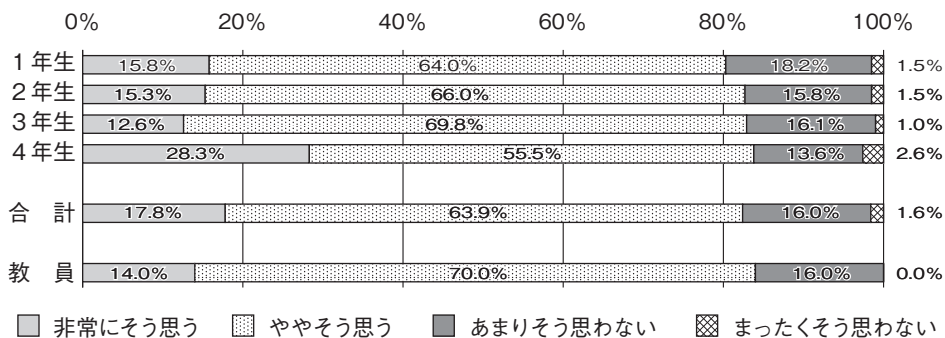


図8 様々な能力の向上、最先端の専門知識が身に付くようなカリキュラムである

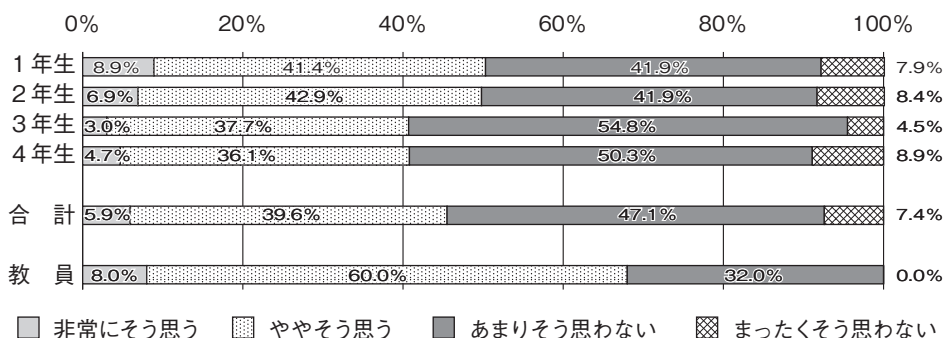


図9 グローバル化を意識したカリキュラムである

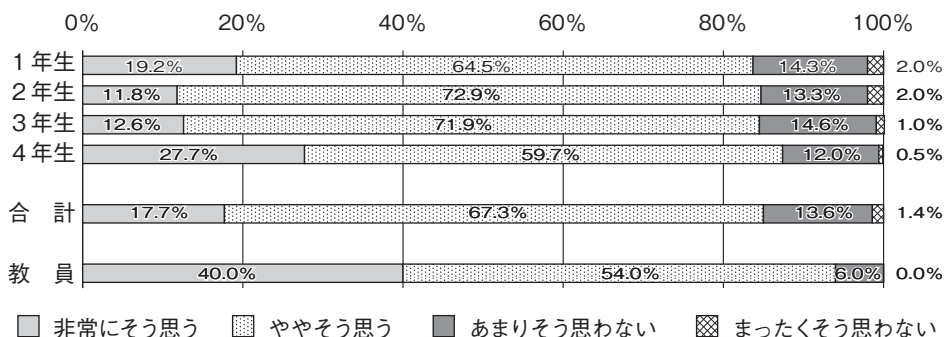


図10 「人間と教養」「人間の健康」「看護の理論と方法」「医療看護の統合と発展」の枠組みは適切である

は、学生も教員も80~90%が「そう思う」と回答した(図10)。

- (4)「授業科目の各学年の配置は適切である」は、学生約70%、教員約60%が「そう思う」と回答した(図11)。
- (5)「授業科目で重複する内容が多い」は、学生も教員も70~80%が「そう思う」と回答した(図12)。
- (6)「各科目の授業時間数は適切である」は、学生約70%、教員約60%が「そう思う」と回答した。
- (7)「必修科目と選択科目のバランスが良く配置され

ている」は、学生も教員も約60~65%が「そう思う」と回答した(図13)。

- (8)「学生が自由に選択科目を選択できるように配置されている」では、学生約55%、教員約40%が「そう思う」と回答した。
- (9)「就職をしても困らない教育と臨地実習が組み込まれている」(図14)「ディプロマポリシーが達成できるコンピテンスとコンピテンシーになっている」(図15)では、学生も教員も約70%~80%が「そう思う」と回答した。

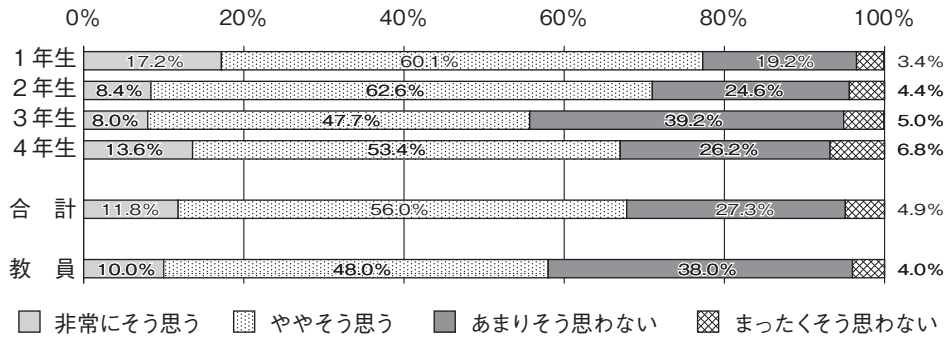


図11 授業科目の各学年の配置は適切である

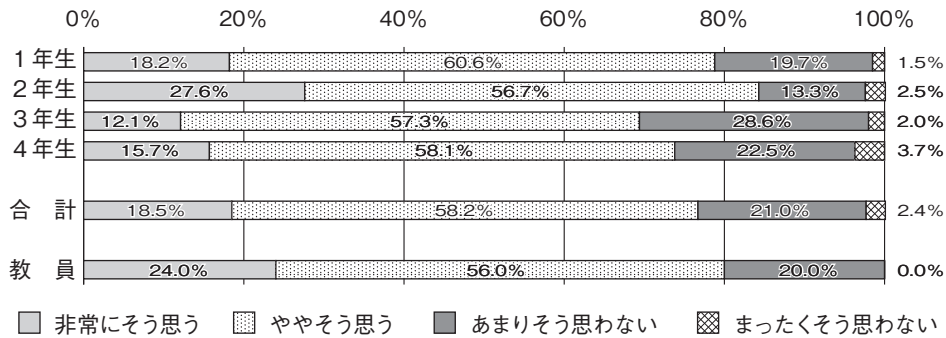


図12 授業科目で重複する内容が多い

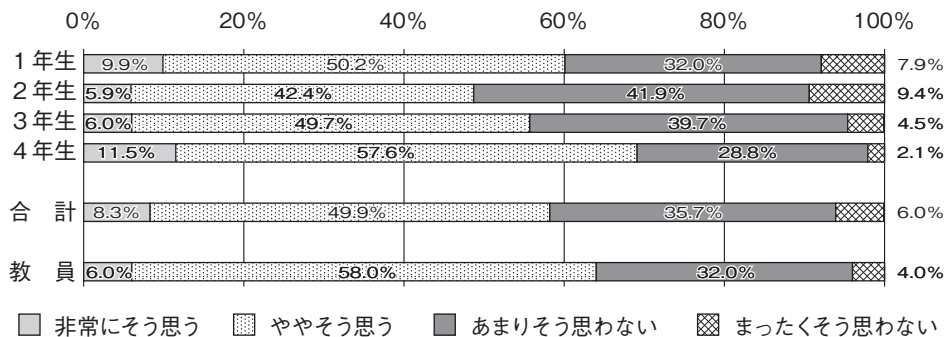


図13 必修科目と選択科目のバランスが良く配置されている

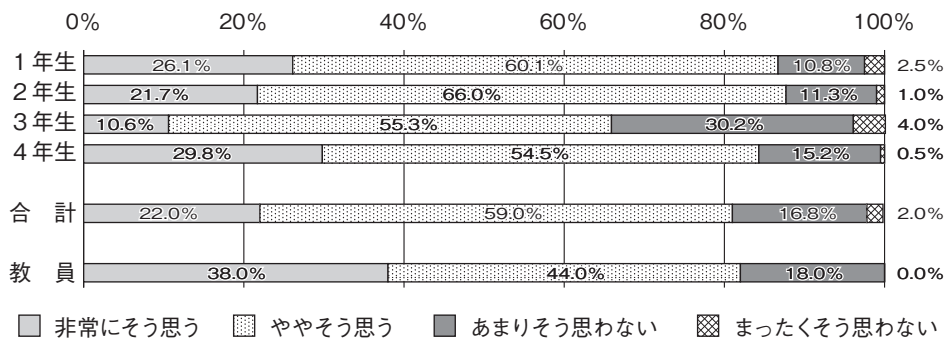


図14 就職しても困らない教育と臨地実習が組まれている

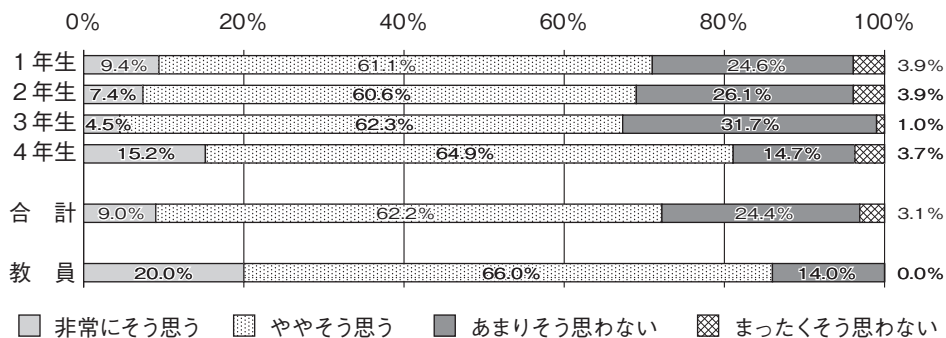


図15 ディプロマポリシーが達成できるコンピテンシーになっている

2) カリキュラム運営

「学生の声をカリキュラムに反映する仕組みがある」は、学生約50%、教員60%が「そう思う」と回答した。「ガイダンスやオリエンテーションでは履修指導が適切に行われている」は学生約70%、教員約80%が「そう思う」と回答した。「アドバイザー制による、履修相談のしやすさ」では、学生の60%、教員の80%が「そう思う」と回答した。

履修要項、教育要項、履修手続きやカリキュラム上の各種手続きシステムについては、学生約70%~80%、教員80~90%が学修に役立つとしていた。

3. 教員のみを対象にしたカリキュラム評価（運用、改革の成果、カリキュラム分析・評価とカリキュラム改革）

1) カリキュラムの運用

「カリキュラム運用のために適切な予算が支給され、運用がされているか」に対しては、約70%の教員が「そう思う」と回答した。「カリキュラム運用のために必要な学習環境（施設・設備）が整備されているか」に対しては、約70%の教員が「そう思わない」としている。「適切な体制が構築されているか」に対しては、76%が「そう思わない」と回答した。また、「卒業生など学外からの声をカリキュラムに反映する仕組みが構築されているか」については、約30%が「そう思う」と回答した。

2) カリキュラム改革の成果

「社会の要請を意識したスキル・能力の育成、基礎的な知識の修得のどちらかに偏っていないか」について、「そう思う」は約50%だった。「現在運用しているカリキュラムに対する教員間での合意形成は充分に図られているか」は、約60%が合意形成していると捉え

ていた。「各科目の担当教員はディプロマポリシーと関連付けて授業を実践できているか」について、80%近くが「そう思う」と回答した。また、「カリキュラム改革によって、改革の目的は達成されているか」は、約70%が「そう思う」と回答した。「大半の学生が主体的に学ぶ姿勢や汎用的能力、専門的知識が身につけられるか」では、約50%が「そう思う」としていた。

3) カリキュラム分析・評価とカリキュラム改革

「カリキュラムを評価するために適切な指標やデータを選択・収集した上で、分析できているか」「分析結果に基づきカリキュラムの課題や問題点の把握し、総合的に評価できているか」「分析・評価の結果を組織内で共有できているか」「分析・評価の結果をふまえて、次のカリキュラム改善に生かすことができているか」については、約60%が「そう思う」と回答した。

VI. 調査結果のまとめと今後の課題

今回の結果から、学年が進むごとにDPの達成が果たされるコンピテンシーであることが明らかになった。その意味では、学年ごとの達成状況を見るだけではなく、学習進度とコンピテンシーの関係にも注目する必要がある。

5つのDPのうち、最も学生の到達度が高いのはDP1【豊かな感性、教養および高い倫理観を備え、他を思いやり、慈しむことのできる能力】であり、約80%の学生が「そう思う」と回答した。しかし、下位項目にあるDP1-Bのコンピテンシー「特定の外国語を用いて、読み、書き、話すことができる」は「まったくそう思わない」の回答割合が約20%と全体の中で最も高く、到達度が低かった。

DP2【個人、家族および地域社会の人々それぞれの健康レベルに応じて、知識・技術を駆使し、エビデ

ンスに基づいた看護を実践できる能力】では、コンピテンスAのコンピテンス「人体の構造と機能を説明できる」、コンピテンスBのコンピテンス「地域の特性と健康課題をアセスメントできる」では、「そう思う」の回答割合が約60%と到達度は低かった。

カリキュラムに関する学生へのアンケート調査からは、【就職をしても困らない教育と臨地実習が組まれている】という項目に対して肯定的な回答があった。しかし、【授業科目の各学年配置の適切さ、授業科目で重複する内容が多い】の項目は「そう思う」といった回答がなされた。

一方、教員へのWeb調査では、教員の68%が「グローバル化を意識したカリキュラムである」と回答したのに対して、学生は約45%であり相違が見られた。授業科目の重複した内容が多い点は、学生と同様の意見だった。これらの結果から、学生教員間の認識の違いの原因や重複する科目の内容について明確に改善していく必要がある。しかしながら、必修と選択科目のバランスは良く配置されていると、教員学生共に60%が回答していた。カリキュラムの運用や改革の評価では、過半数の教員が合意形成して運用していると回答した。また、カリキュラム改革の目的は達成されていると、教員の70%が回答していた。この回答が学生の教育にどのように反映しているのかも含め細かく分析していく必要性が示唆された。

今後は、この調査を生かし、各学年のカリキュラム構成、学年ごとのコンピテンス・コンピテンス達成度に加え、4年次終了時のディプロマポリシー達成度における到達目標及び評価も視野に入れながら検討し

ていく必要がある。その上で、科目間の内容が重複しないように互いにシラバスで関連する科目の内容を確認するとともに、科目間の情報を共有できるシステムを構築することが重要だと捉える。

また、今回使用した質問紙は本学の教育方針であるディプロマポリシー・カリキュラムポリシー・アドミッションポリシーのコンピテンス達成度であるため、学生が自分自身の学習状況や態度を振り返り、目標に向かって学習を進めていくことができるように、ポートフォリオ等を用いて、フィードバックすることも検討していきたいと考えている。

謝辞

平成29年度カリキュラム評価委員会の調査にご協力いただいた学生と教員の皆様に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 中央教育審議会(2016). 3ポリシーの策定の動向. 文部科学省ホームページ. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo04/038/siryo/_icsFiles/afieldfile//2016/04/25/1369683_04.pdf (May 04,2018)
- 2) 山田剛史(2014). カリキュラム評価を教育改善サイクルに組み込み、実質化するための視点 第1章カリキュラム改革の4つの視点. 日本高等教育開発協会・ベネッセ教育総合研究所共同研究『大学生の主体的な学習を促すカリキュラムに関する調査報告書[ケーススタディ編]』, pp.50-56, ベネッセ教育総合研究所.